国語部会②　　平成二九年十月十三日(金)

演題「詩歌の読み方」　三枝昻之先生（歌人、日本歌人クラブ会長、山梨県立文学館館長）

# **〈１〉活字文化の魅力**

　皆さんこんにちは。去年は確か短歌の評価の仕方についてお聞きいただいたと思います。評価よりも大切なのは読み方です。短歌や俳句、詩の読み方はなかなか難しいところがあります。そのことについて参考になればと思いまして、いくつか、私なりの見解をお伝えしたいと思います。

　その前に忘れないうちにぜひ･･･　九月から、山梨県立文学館では津島祐子展が開かれています　文学館は県立、県民の税金で運営されている文学館ですから、必ず、県民にそれだけサービスを返しているかが問われます。館長としては悩ましいところです。文学館について私は、県とかメディア向けには「たった一人の数時間の至福」を提供する場所であり、入館者数、すなわち数ではないということを一生懸命言っているわけです。たとえば、こんな雨の日に津島祐子展をじっくり見て、二時間位かけて見て、そこでその人なりの小さな「ヒント」を、悩みとか生き方に対するヒントをその人がもらえば、それこそ文学館の役割です。「花子とアン」の時はものすごい数の人が来たわけですけれども、それは望ましい形なんですが、一人しか来ない雨の日に、小さなヒントを提供するのが文学館の役割であると、一応言っている訳ですけれども、「津島祐子展の来館者はどのくらいであったか」という、一番の尺度は入館者数です。やはり気になります。ぜひ来て下さい。

　今回の企画展ですが、津島祐子さんは去年お亡くなりになりましたけれども、お母さんが石原家の人で、都留高女の先生ですね。太宰と結婚して津島祐子さんが産まれたわけです。･･･本当は太宰研究をするときに、太宰のことだけではなくて太宰の連れ合いがどんな系譜の人で、どんな人生を送ったかが、とても大切なんです。その資料が今回はものすごく充実しております。東京の研究者の方が、こんなに石原家の資料が充実している展示は今までなかった、太宰研究のためには必見の企画展だと言っていました。ぜひ来て下さい。館長があまり自分の仕事を褒めるのも何ですが、津島祐子さんが県立文学館を支えて下さった、その縁（えにし）に答えることの出来るような企画展だと思っております。

## **○県立文学館７／３０辻村深月さん講演「フィクションの向こう側」トークから二点**

　文学館はいろいろなことをしています。今年の夏には「作家のデビュー展」という企画展をしまして、その中でミステリー作家の辻村深月さんに講演をしていただくと言うことになって、ただ一方的に講演するのではなくて聞き手が欲しいということで、私が聞き手を務めたと言うことがありました。せっかくのトークですから、こっちが問いかけをして向こうが答えて下さるトークをしたんですが、非常に辻村さんは聡明な人だということが、改めてわかりました。猛烈な勢いで小説を書いていらっしゃるので聡明は当たり前なんですが、あれだけ、こちらの問いに対してクリアな答えを返してくれる小説家、あるいは詩人、歌人・俳人はなかなかいないと思って、私は非常に感心しました。

　さて、今日の話のとっかかりになればと思いまして、資料を二，三点用意しました。（資料一頁目）

あれは作家のデビュー展、辻村深月さんのデビュー作は「冷たい校舎の時は止まる」ですね。ミステリー小説という触れ込みですが、僕が読んだ範囲では「この小説はどういう特徴を持った小説ですか」と問われた時「青春群像小説」だと答えます。これは青春小説だと思った。辻村さんはミステリーとおっしゃるけど、わたしはそういう風に読みました。すると「自分では全くそういう意識はないんだけれども、意外とそういう反応も少なくない」と。作者が、これはミステリーの面白さだとして作った物が、読者には青春群像小説に見える。あれは主要な登場人物が八人出てきますけれども、誰が誰を好きでというような関係図が作れる。とてもその八人の造型が細やかに出来ていて、そういう点でも、良い。確かにミステリーはミステリーなんですよ。学校に閉じ込められる。三階建ての学校が突然五階建てになる。そういう怪奇現象がふんだんに散りばめられている。ミステリーなんですが、全体を通して浮かんでくるのは青春の手探りと友情の大切さと言うことだと、そう思ったからそう言ったんですね。つまりそこで、作者の意図と読者の受け止め方が違うということが一つあります。

## **活字文化の魅力**

もう一つ辻村さんにぜひ聞きたいと思ったことは、辻村さんは三十代、まだまだ若い。しかし今の趨勢では、活字文化の勢いが悪く…。前は映画の原作といえば小説でしたけれども、アニメやコミックを原作にもつ映画があることも一つです。そうした広い意味での、映像的なものの方に行く趨勢の中で、どうして辻村さんのような若い方が小説を選んだのか、聞きたいと思ったんですね。彼女はこんな事を言いました。資料にあります。（資料一頁目）

「小説は、作者だけでは成り立たない。読者が一つの文章をヒントに、人物や場所、物に対する自分のイメージを引っ張り出し、創造した世界で自由に遊ぶことが出来る。作者と読者の共同作業ができる小説は、懐の深いジャンルだ。」（資料一頁目）

そういう風に言っていて、人気の流行作家に失礼ですけれども、感心しました。小説は読者と作者の共同作業、これはとても大切なことだと思います。文字は抽象的なものですから、作者の意図通りには読者に届かないことが非常に多い。むしろそれが宿命的な伝達手段だと言っても良いと思いますけども、映像文化と活字文化は違いますね。

## **小説と映画の比較**

この間ノーベル文学賞を受賞したカズオ・イシグロの「日の名残り」はとても良い小説ですけれども、主人公はある貴族の執事ですが、暇をもらってイギリスに小旅行に出掛ける。すぐ近くの山に登ったら、「一番イギリスらしい風景が見える」と言われて、執事はその言葉にしたがって丘の上に登って、何が見えたかというと、秩序正しく区画整理をされて、丘の自然なうねりにしたがって色分けされた田園風景。この描写がすごく良い。僕はこの描写が好きだから、映画になった時にこのシーンがどう映像化されるかを見たいから、その映画を見に行きました。ところが意外なことに、まったくそのシーンが出てこない。これはびっくりした。僕から言わせると、あれは一つのクライマックスなんです。イギリスは何か、と言ったら、細やかに手入れをされた田園風景だよ、と。そういうメッセージなんですよ。ところがそれが出てこない。これは、あの描写をうまく受け止めることが出来る映像化が出来ないと思ったから、映像にしなかったんだと思います。

もう一つは、―活字文化でなければいけない、映像文化では表現できない世界の話です―　三島由紀夫の「春の雪」です。あの小説のクライマックスは、清顕と聡子、二人は幼なじみで、お互いに好き合っている。聡子が宮家と婚約すると、清顕は自分の恋心を抑えることが出来なくて逢い引きを繰り返すんです。…聡子が身ごもって、宮家との婚約を解消するんですけれども、清顕と結婚するわけにはいかないので、月修寺という寺に入って仏門に入る。聡子にどうしてもひと目でも会いに行きたい清顕は、月修寺へ日参する場面がある。その場面が資料にあります。（資料一頁目）

「今、自分に出来ることは一つしかない。病が篤ければ篤いほど、病を冒して行ずることに、意味もあり力もある筈だ。それほどの誠に聡子は感応するかもしれないし、しないかもしれない。しかし、今やたとい聡子の感応が期待できなくても、自分に対して、そこまで行じなくては気の済まぬところへ来ている。　（中略）　すでに五日目、六回目の訪れであるから、目をおどろかすものは何もない筈なのに、今、俥から、綿を踏むような覚束ない足を地へ踏み出して、熱に犯された目で見廻すと、すべてが異様にはかなく澄み切って、毎日見馴れた景色が、今日はじめてのような、気味のわるいほど新鮮な姿で立ち現われた。その間も悪寒はたえず、鋭い銀の矢のように背筋を射た。　（中略）　この、全くの静けさの裡の、隅々まで明晰な、そして云わん方ない悲愁を帯びた純潔な世界の中心に、その奥の奥の奥に、まぎれもなく聡子の存在が、小さな金無垢の像のように息をひそめていた。」（資料一頁目）

という一説なんです。このシーンを、映画はどういう風に映像化したんだろう、ということで、このシーンの映像化を見たいが為に映画を見に行きました。キャストは妻夫木聡と竹内結子。良いキャストでしたね。特に竹内結子はぴったりでしたね。あの映画からファンになりました。さてこのシーンはどのように描かれているかというと、小説の中では六回訪れてその都度断られた、最後の場面です。映画では、一度目は清顕が断られて門前で夜を明かす。それでも断られて宿に帰るんですが、二回目に清顕の親友の本多が、熱に浮かされた清顕の代わりに談判をする。そんな流れでした。さて、引用に戻りますが、車で月修寺の門前へ行って月修寺の坂と階段を上がる、とても良い場面だけれども、妻夫木聡は、あえいで一生懸命登っているだけなんですよ。この三島由紀夫の文章だと、彼の内面と風景が一つに融け合っていて、一つの美的な世界として広がる。こういうのは映画も頑張っているんだけれど、映像としてはこの場面を活かすことが出来ない。場面は悪くないけれども、清顕の内面を活かせずただ苦しみだけになっている。

「春の雪」と「日の名残り」について映画と原作の比較もしてみたんですけれども、逆の場合もあります。もちろん映像だから、映画だから表現できる、文字では表現できないけれども映像なら表現できる、ということもあります。「砂の器」という松本清張の小説があります。あれは父親が癩病患者で全国を放浪している。少年と父親はどこへ行っても追い出されるんだけど、その四季折々の風景の中をさまよう親子の姿がすごく美しい。あれは映像でなければ表現できない世界だなあ、と思います。

そういうこともありますが、今は、活字というのはどういう特徴があるか、ということを確認することが大切です。そこでいうと、言葉というのはもともと抽象的なものですから、どうしても読者を補わないといけない。たとえば、「あ、雨だ」という言葉でも、どのような雨を思い浮かべるかは一人一人違うわけです。映像であれば皆に同じイメージを示せるけれど、言葉だけでは抽象的で、「どんな雨か」ということは一人一人が自分の中の想像力を働かせて、映像にしなければいけない。ここが活字の非常に大きな特徴で、辻村深月さんの話に戻しますけれど、自分が書いた物を、読者の想像力でいろいろ引っ張っていく。だから小説というのは奥が深い。これと重なるようですね。僕は小説家がそういうことを言うとはちょっと思わなかった。短歌や俳句や詩は、読者の読みが関わらなければ完成しない。元々そういうジャンルです。小説はそうではないと思っていたけれども、辻村さんのような小説論がある。これはむしろ、一つの作品に読者が参加しないと、作品として成立しない。そういう性格がある。これは活字文化の一つの大きな特徴ではないかと、まとめることが出来るのではないかと思います。

# **〈２〉詩歌の読み方**

## **（一）場面について**

　詩歌の読み方の話題では、皆さんにも加わっていただきたいと思います。辻村さんが言ったように、小説は作者と読者の共同作業である。小説もそうだけれども、短歌や俳句や詩はよりいっそうその要素が強い。つまり、読者の受け止め方で、内容が、主題が変化する。なぜ短歌や俳句に違いが出てくるか、これは場面の読み取りというのが非常に大きいと思います。たとえば飯田蛇笏の有名な俳句です。

①芋の露連山影を正しうす　　飯田蛇笏　（資料二頁目）

これ、どういう場面でしょう？（出席者に問いかける）

（以下返答）里芋畑で、大きな葉があって、南アルプスの姿がよく見える…。

三省堂の「名歌名句辞典」という本がありまして、その中で筑紫磐井という俳人がこんな解説をしています。「里芋の葉に露が宿り、その一粒一粒に山々が影を宿している、という句。」…僕はそうじゃないと思っていたので、これを読んで少々びっくりしました。僕は近景と遠景と読んでいます。自分の近くの傾斜地にある芋畑で、芋の大きな葉に「芋の露」が宿っていて、目を遠くにやると、南アルプスの山々が姿を正して連なっている。つまり近景と遠景のコントラストの中で、山国ならではの秋の印象深さを言ったと、私は最初からそう読んでいたんですが、この人の読みとは違うわけですね。しかも辞書に載っている。…磐井氏の読みだと、露の一つ一つに山々の影が映っている…。どうでしょうか？この人は俳論家としてかなり有名なんです。俳句論の分野で能弁で多力な仕事をしている一人で、現在の俳壇を代表する論客といってもいい。その彼がこの読みをしたことに私はびっくりしました。またこれには監修者がいるわけで、その監修者もＯＫを出したということですね。そういう読みも成立すると思って活字にしている。岩波書店が「現代短歌辞典」というのを作ったときに、岡井隆さんのチームなんですけど、最後の査読というところで岡井さんは僕と小池光という歌人に任せたので、二人で分担して査読をしました。執筆者の方にはものすごく直してもらいました。そんな作業をここ「名歌名句辞典」でも当然しているわけです。…俳句の世界ではこういうことってあるんです。「山の影が映るほど清冽な露が宿っている」という読み、僕はこの読みはおかしいと思うんです。芋の露に映ったら山の影の像はひっくり返るはずですからね。僕はそう言いたいけれども、短歌や俳句の世界ではこういうことが日常的にあって、一つの作品にいくつもの解釈があって決着が付かないということがある。僕に言わせればこんなに明快な俳句でも読みが二つある。そして、それがそのまま続いていると言うことがある。

続いて短歌です。寺山修司です。非常にわかりやすい初期歌篇、高校生の時の作品です。

②海を知らぬ少女の前に麦藁帽のわれは両手をひろげていたり　　寺山修司（資料二頁目）

寺山修司のファンの人だったら必ず読んでいるでしょう。これはどういう歌ですか？

（以下返答）資料のＡの方だと思います。　　Ａ：海の広さを懸命に少女に教えている

Ｂ：海へ行こうとする少女をストップ

少女は海を知らない。少女に「海はこんなに広いんだよ！」と教えている。僕はこの読みなんです。しかしこれもなかなか統一されないですね。「海を知らないから見に行きたいんだ」という少女をストップする、こういう読みも結構あります。どちらも主題は「少年のほのかな恋」ということでは変わらないと思います。「教える」という所で、少女に対する関心が無ければそれだけ一生懸命教えないでしょう。ストップをかけるという読み方も、「自分は知っているけど少女は知らない」そういう関係性の中の少女が愛しいんだけれど、海を見ちゃった少女は自分の範囲から離れちゃうんじゃないかという、全然違うところへ行っちゃう可能性があるからそれでストップをかけている。という読みですね。皆さんはどっちでしょう？どなたかに聞きましょうか。

（以下返答）私はＡです。理由は、「両手を広げる」というのが、相手に対して気持ちとか一生懸命さとか、心を開いている、向き合っているという場面が想像できる。相手に対して「行っちゃだめだ」と体を開くというのは、ちょっと違和感があります。

まあ、こういう読みの方が多いだろうと思います。私の読みは素直ですからね。これがどんな場面かというと、「麦藁帽」ですから、夏の光の中で「私は海を見たことないのよ」と言ってる少女と、「（腕を広げて）こんなに広いんだよ」と行って、背後には夏の明るい日差しが広がっている。そんな場面をイメージするんですが、たとえば同じＡの読みでも、外でなくて、少女は病気で、病院に行って海の広さを教えているんだという「アホ」もいるんですね。そうするとなぜ「麦藁帽」を被って病室なのか、と私は不自然に思うんです。ただ、こういうのは「１＋１＝２」というようなクリアな考え方はできません。一番肝心なことは、授業の場面では「読みは一つだよ」ということは言っちゃいけない。例えば、「芋の露連山影を正しうす」からどんな風景が見えてきますか、と。その見え方は大きく言うと、ここで挙げたのは二つなんですが、この二つのどっちが良いか、それは「わからない」とする。「われは両手をひろげていたり」もストップをかけているのか説明しているのか…と場面としては複数の読みが出るんですが、「どちらの方が歌の主題を活かすだろうか」という議論をする事が大切で、その議論の中で「やっぱり、ストップをかけているとする方がいいのではないか」となるかもしれないけれども、一番肝心なのは、複数の読みが短歌や俳句には付きまとうから、生徒に一つの短歌や俳句の授業をするときに、「まずどんな場面だろうか」ですとか「その場面からどんな主題が見えるだろうか」と投げかけることです。それぞれで読んでもらうんですけれども、例えばこの寺山修司の歌だと、読みは三つ出てくる。それぞれの読みを付き合わせて議論をする中で、「自分はこの読みが良い」「私はこっちの読みが好きだ」と、一つにまとまらなくても良いという事が、短歌や俳句の鑑賞の仕方では大切です。ただし、試験だと困りますよね。「○○とは何か」「○○はどのような場面ですか」というような時に複数の回答があるというのは…まあこれは皆さんの方がプロで、僕は勝手な創作者ですから、あくまで僕の立場からは「複数の読みがあることが大切ですよ」というまでに止めておきます。

まず場面を読み取る、読み取り方の違いというのがそこで出てくるから、一つに決めないで議論をする。それぞれの読み方を大切にする。短歌や俳句の鑑賞の仕方で「これはこういう世界だ」と一つ決められると生徒にとっては馬鹿馬鹿しい。むしろ自由な鑑賞を許してもらえないと、窮屈になってしまうという傾向が強いですから、ここは注意していただきたい。

## **（二）短歌や俳句はエキス表現。読者は補いながら読み、鑑賞する必要。**

二番目に、短歌や俳句―詩や小説についても同様かも知れませんが、短歌や俳句は特にそうです―「エキス」の表現。肝心なことしか言いません。十言わないと完全には分からないけれども、表現量が制限されていますから三つくらいのことしか言えない。読者としては補いをしながら鑑賞しなくてはいけない。

③戦争が廊下の奥に立つてゐた　　渡辺白泉　　（資料二頁目）

　渡辺白泉の名句ですが、人間でも動物でもない「戦争」が「立つてゐる」とはどういうことか。やはり、自分なりに考えて「補い」をしなければならないでしょう。それから、どうして玄関ではなくて「廊下の奥」なのか。まず、家に入ってきて立つのは玄関です。なぜ玄関ではなく廊下の奥なのかということを補わなきゃいけない。これは、気がついたら暮らしの中まで戦争が浸透してきたということを言いたいために、玄関ではなく廊下の奥とした。廊下の奥といったらこれは家の中でも奥ですから、「気がついたら戦争が生活のすみずみまで浸透していたという驚き、戦争が廊下の奥の暗いところに立っているってすごく不気味ですよね。恐怖を駆り立てるようなイメージがあるから、「廊下の奥に立つてゐた」という表現になる。「なぜ戦争が立っているのか」「なぜ玄関ではなく廊下の奥なのか」という点の補いをしないとこの俳句の意味は見えてこない。短歌や俳句は、補いの度合いが大きい表現ですから、補いをすることが大切なんです。

　　④あの夏の数かぎりなきそしてまたたつた一つの表情をせよ　　小野茂樹　（資料二頁目）

　小野茂樹さんという人は、早稲田短歌会の僕の先輩なんですけども、四年で卒業するのが恥ずかしいという困った風潮がありまして、僕は四年で卒業したんですが彼は上限の八年まで居て、それでも卒業しないで中退したという豪傑でしたが、作品は非常に繊細な柔らかい作品なんです。この歌では「数かぎりなき」「たつた一つ」という…これは二つ合わせるとどういうことになるのか。そこをやはり皆で考えるわけです。それからこの歌の肝心なところは「表情をせよ」という最後の命令形です。この命令形にはどのような効果があるか…いろいろ読み方があります。どうでしょう？例えば生徒に、「なぜ『数かぎりなき』と言っているのに『たつた一つ』なの？と聞かれたらどう答えますか？もちろん「よくわからない」という答えでも良い。

（以下返答）つい前の歌に引っ張られて「あの夏」に戦争のイメージを持ってしまって…

　なるほど。僕の先輩ですから、戦争はとっくに終わっている頃です。例えば、「あの夏」というと、たぶん恋人同士が富士山麓なんかで一緒に過ごして、色々あるわけですよね。嬉しい顔を見せるときもあれば泣いた顔を見せるときも…表情は色々「かぎりない」けれども、その表情はたった一つの、かけがえのない君だけの表情だったよと、僕はそういう風に読みます。他の読みもありますから、あくまで参考程度にしていただければいい。難しいところでもあります。もう一つは「表情をせよ」です。命令形ですから、今はそういう場面は失われた。そういうことを匂わせてますよね。あの時の君を呼び戻したい、それを呼び戻す術がないということです。聡子が月修寺に入っちゃったときの清顕の気持ちと同じだと、そんな風に僕は読んでおります。「呼び戻す術のない恋」この歌の主題はこれなのではないかと思います。

　短歌や俳句はエキス表現ですから、補いをすることが大切です。それは場面を読むときと同じで、必ずしも一つの正解にたどり着くとは限らない。むしろ一人一人の味わい方が大切だということです。

## **（三）作品だけで読むか、背景にあるデータを重ねて読むか。**

それからもう一つ大切な問題があります。特に短歌についてですが、作品だけで読むか、作品の背後にある作者のデータを踏まえて読むか。これはなかなか難しい問題で、短歌は一人称詩型、「私の詩型」という風に言われますから、作品の背後には必ず「我」がいる。その「我」は作者ではないかという読み方が非常に大きい訳です。例えば石川啄木ですと、

やはらかに柳あをめる

北上の岸辺目に見ゆ

泣けとごとくに

これは、作品だけで読むと望郷の歌です。盛岡出身の啄木が、春先の、柳が青く芽吹く北上の風景を目に浮かべて懐かしむ。ですがここの問題は、なぜ「泣けとごとくに」なのかということです。これはよほど切実な問題です。私は甲府の生まれで、今神奈川県に住んでいます。もちろん望郷の気持ちはあります。しかしここでは「泣けとごとくに」…普通「望郷」というのはここまで強くならない。実は、啄木は故郷から追われて、函館から東京へ出てきた。故郷を通るのが嫌だったからわざわざ海路を通って行った。つまり故郷は恋しいんだけども帰る術がなかったし、実際帰らなかったんです。このように作者の人生を重ねると、「泣けとごとくに」がうまく説明できるんです。さて、この説明で良いかどうかですよ。作品だけで読むのか、データを重ねるか、短歌の鑑賞では難しいところです、ここでは幾つかの例を持参しました。まず自分の歌です。〈資料二頁目〉

⑤しずかなる全力ありて咲き初めるまず紅梅の二輪三輪　　三枝昻之（資料二頁目）

　これは歌だけ詠むと、紅梅への、静かな営みへの感動、それでいいと思います。ただこの歌はですね、毎日新聞に載せたんです。ちょうどセンター試験の時期、僕はその時に五首、センター試験に臨む受験生に何かエールを送りたいと思って作ったんです。そんなデータを加えてこの一首に戻ると、「しずかなる全力ありて」というのは、例えばスポーツ選手の全力というと体を発散させる、卓球の選手が一点ごとに叫ぶようなイメージですが、受験生の全力というのは静かな一点集中の全力です。受験生の全力というのはそういうものだというのがまず一つ。それから花が咲くという、「桜咲く」といったら昔は合格です。「桜散る」といったら「落ちた」と。ということで「まず紅梅の二輪三輪」、君たちの静かな全力はきっとうまくいくよと、自分ではこういうメッセージを込めたつもりなんですが、歌だけで読むと「紅梅の静かな営みへの感動」ということになってしまう。

　⑦水洟や鼻の先だけ暮れ残る　　芥川龍之介　（資料二頁目）

どういうシチュエーションでしょうか。作品だけで読むと、鼻水が垂れる風邪の引き始めですかね。風邪を嘆いていると読むことも出来る。鼻が垂れて困っていると、そこで止まったって良いんです。ただこれには、前書きがあるんです。「自嘲」というものです。このデータにエピソードを付け加えると、芥川龍之介は自殺するでしょう。その前の日に、この俳句を短冊に書いて、自分の主治医に届けさせたんだそうです。そこを考えると「すみません。私はもう駄目です」…そういうメッセージになりますね。太宰も同じです。「池水は濁りににごり藤波の影もうつらず雨降りしきる」伊藤左千夫が、梅雨の末期の、激しい雨の亀山天神の風景の歌がありますが、これを太宰は色紙に書いて、自分の友人に残した。伊藤左千夫が純粋叙景歌として作った歌が、太宰は自分のラストメッセージとして使ったわけです。「俺は駄目だよ」と…。このように作品の表面上の意味に、あるデータを加えると、ぐんと違った色彩を持つというのが一つの大きな大きな特徴で、言ってみれば短歌や俳句は象徴詩だということがそこで言える。

ではどちらが良いか。これは難しいところで、例えば⑤の私の歌は、紅梅に対する感動というところで終わって良いと思います。だけれども龍之介の⑦の句は、命がもう消えて鼻の先だけ残っているよと、データを加えないといけない。だから必要があればデータを加えて鑑賞を届けるということが、やはり大切かなあと思います。では⑨番の歌に行きましょうか。

　⑨ああ鳥は飛べるんだった仰向けば眩しい空に涙がにじむ　　黒崎由紀子　（資料二頁目）

これは歌だけ読むと、どういう歌でしょうか。「ああ鳥は飛べるんだった」とは、鳥が空を飛んでいるのは当たり前。普段はそんなことに立ち止まって感動しないんだけれども、黒崎さんはここで立ち止まっている。しかも「ああ鳥は飛べるんだった」と思いを込めているわけです。何だろう？何かがあった。何かがあったからこういうふうな感動をまず示した。こういうことになるんでしょうが、可能性があるのは何でしょうかね。僕は加藤登紀子の「この空を飛べたら」という歌があります。すごい失恋の歌なんです。痛切な失恋をして、空を見上げると鳥が自由に飛んでいる。もしかしたら人は昔は鳥だったのかも知れない…そんな歌が最初思い浮かびました。「ああ鳥は飛べるんだった」ですよ。自分の中に痛みがなければこういう反応はしないです。これは失恋ではないか、というのが一つ。失恋の心の痛みがこういう表現になったのかなあ、とも読めますが、…実はこの歌は、阪神淡路大震災の直後の歌なんです。この人は被災地域の方で、これは震災の歌なんです。そこで見えてくるのは、地上はもう全部崩壊をして、瓦礫ばかりの中に自分は立ち尽くしている。その茫然自失の中で空を見上げた時に、何の障害もなく鳥が飛ぶ姿はすごく眩しく見える。一連の中ではそういう歌なんです。だから一首で読む時と、一連の中で読む時とは違った歌になる。失恋の歌か震災の茫然自失の歌か、二つの読みを示すことによって、短歌や俳句の持つ暗示力を読者に理解してもらうことが出来る。そんなことがあると思います。

時間が無いので⑧番の詩に行きます。

　　⑧彼女の白い腕が

　　　私の地平線のすべてでした。　　マックス・ジャコブ　（資料二頁目・四頁目）

僕はこの詩が大好きなんです。たった二行です。これは自分の心の中に残る永遠の恋です。永遠の恋、「でした。」ですから過去のことです。自分に過去の恋があって、かけがえのないものとして自分の中に大切に残っていますと。「私の地平線」という言い方がすばらしいということを言っておきたい。かけがえのない一回的な恋だということが読者に伝わる。これだけでも十分なんですが、私はこの詩を紹介するときにはジャコブの人生が過酷さも言っておきたいんです。私の詩歌を鑑賞した『夏は来ぬ』からの引用です。（資料四頁目）

恋人が両腕を鳥のように広げている姿を思い描いてもいいし、ありのままの姿と読んでもいい。肝心なのは彼女を「私の地平線のすべて」と述べたところ。〈君は私の太陽〉といった表現よりもはるかにセンスがあり、思いが無限に広がる。　（資料四頁目）

　まあ、これが鑑賞です。だけれどもここにデータを加えるというのが、先ほどの資料の左のページの五行目からです。（資料四頁目）

　　　ジャコブは一八七六年生まれのユダヤ人。フランスのブルターニュに生まれ、パリに出てアポリネールやコクトーと交流を持った。詩や小説、戯曲も書き、アポリネールとともにフランス現代詩の先駆者とされる。

しかし第二次大戦時のユダヤ人排斥の動きの中でドイツ軍に逮捕され、パリ北東のドランシー収容所に送られた。ここはナチスがフランスのユダヤ人をアウシュヴィッツ収容所などに移送するための通過施設だった。

コクトーやアンドレ・マルローが助命に走り、一九一五年に改宗してカトリック詩人になったことなども添えて嘆願書をドイツ大使館に提出したが受け入れられず、収容されてからひと月も経たないうちに病死した。一九四四年四月五日のことである。この年八月には進軍してきた連合国軍がナチス占領軍との激しい戦いに勝利、パリは解放された。

ジャコブがもう少し生きていたら、彼には長く穏やかな晩年が待っていたかもしれないし、逆に、アウシュヴィッツに送られて過酷な死を迎えたかもしれない。

戦争の狂気に翻弄された晩年だったが、詩はその悲惨を超えて今日の私たちに生きる。詩の際のジャコブの眼裏に、切なくも香り高いあの青春の地平線は映っただろうか。（資料四頁目）

　歌としては純粋な、過去の大切な大切な、恋を振り返った歌と読んでいいんですが、彼の人生と重ねるとこの詩の切なさが三倍くらいになるような気がします。短歌や俳句、詩を含めてですけども、作品だけで読むと言うことが基本です。けれども、データを加えることによって、より味わいが深くなる。

## **（四）詩とはなにか、それに対するある提示**

私が一番好きな詩人、長田弘さんの詩です。時間がないので後で読んでおいて下さい。詩というのは大きく二つの傾向があって、一つは言葉の最先端でどれだけ表現を獲得するかと言うこと、表現の冒険をするという詩の生き方です。もう一つは長田さんのように、忘れがちな美しさを再発見する。それが詩の大切な役割の一つだと言えます。当たり前な風景に立ち止まって、それに新鮮な光を与える、それが詩だ、ということを長田さんの詩からは読み取ることが出来る。そんな私からのメッセージを踏まえて、この詩（資料三頁目）を読んでみて下さい。

　※長田弘「世界はうつくしいと」（詩集『世界はうつくしいと』から）、

　　　　　「詩のカノン」　　　　（遺詩集『最後の詩集』から）

の二編。